

13
1245
14

關卷驚奇俠客傳第三集卷之四

東都 曲亭主人編次

第二十回 縫殿自燒 樓と飛ぶ

安次死を送りて生か會ふ

一犬形吠くといふ群大聲相從く虚実の間か惑ぬめり。世不三々。習俗あわれ。
 縫殿既彼岸に報も知せし京師の凶変刺里の風聲の這那符節と合せしむ。
 疑ふもあられぬ。這里も緝捕使と向られし。折衷潔く死なむとの。膽向心いさふ。
 覺期とても言ふおぼしむ。知る生か賞縁。垣衣と枚と與不恁々。誘令室珠。
 院中央鍼辛あつひ。この垣衣つらうら。听て寔は不思議の文あり。御厄會まるゆ。
 といふ左も右もあつひ。計ひの道。下といふあわね。縫刺の技へも。拙くゆるる。然るを。
 御寺へ参りても。尼御并まるの。いさる。稱る。争何のせんと。辨ふと縫殿の听あ。否。暗。



かき事あゆむ大槩の舊衣の鮮洗ひの多き事。やち儘の心。とらるる推
 薦ゆて立おのり納戸より倉中へ来りて匣を昨夜情の地は準備とある。亡君正元
 夫妻の木主菊水の旗金銀をも蔵めし備え措きて後方居る一箇の衣箱を
 多る指示しと喃垣衣刀袷這内かの夏冬の衣袋箇致あり。成身すまわら
 せし小乘時をも他宿の歌へ便るのえの涼の朝暑の日隨意合せて被る。
 又這匣の要も東西復市かかるとも共御寺へて也。智圓禪尼は徳々と
 告稟しと預けまらる。又臂近は措き。這もあらる。然氣もな。誂情
 由の有敷系も右倉の媳婦。良の後の事逆を憑む苦のけの限の復あはし紀念
 贈りの夏染衣も包み随ひ四の櫛て色かおまじと名かの縫殿引。垣衣は洗
 情も感涙と拭ひもあき額て。過世甚摩る罪障も幸あら。幸あら。流離ひより
 今やふよるも夏の草枕。這里は旅宿のひけま。又別添もた奴家とていひと

宣いで御寺へ寓さる。あまの心。かた御恩も。衣を賜へて受もる功あり。その
 美い免。あつと推辞と听し頭と掉。そま益もあ口誼も。這衣箱の内も我
 少り。時被舊と今い要る東西も。あ身も素生の流寓の情由も。向んはま
 かて。具も知らね。絶て入る復市も。伴れ。来り。人。其。徳。隔
 由。あ。心。の。馳。遣。の。心。の。あ。と。垣。衣。の。ゆ。び。の。固。辞。難。て。の。飲。ひ。を
 舒。の。心。の。縫。殿。の。然。と。と。點。頭。て。寫。措。と。る。書。一。通。と。住。持。并。同。宿。の。比。丘。尼。達
 へ。も。我。の。衣。布。施。の。阿。弥。陀。の。御。の。糸。掛。て。願。ひ。と。白。楮。線。の。見。布。尉。火。手。漆。て。指。下。折
 敷。と。俱。推。裏。の。單。袂。見。の。隅。合。を。折。返。し。も。餘。の。あ。る。を。屣。一。夜。の。物。櫛。荷。鏡
 臺。上。遠。那。と。婢。妾。毎。や。も。信。々。皆。端。近。く。お。さ。て。却。農。僕。一。両。名。を。喚。上。り。使。々。と
 詞。急。迫。し。吩。咐。て。身。社。衣。せ。垣。衣。の。卒。と。心。の。會。釋。を。先。に。又。改。め。之。告。別。盡。言
 葉。は。露。る。若。脆。に。涙。を。拭。身。人。の。情。と。形。を。身。の。不。樂。し。と。立。難。し。垣。衣。より。終

殿の所へは我身の獨せん術あり其頭のさの楓念せで徐に準備と備せんと然も
 謀がま言示さるる大家その意に従ふ心もさういふも這年末仕れる恩といへが
 期先も逃れぬとせ困らる明の朝より部外に出るもの割籠と推して送り
 各々身の覚期東西失はれと袂小包に秘事姫松葉密々採入れて受破といふ折
 焼きたとも先へ入るさどいふさるる。自焼の準備果ての俱小客考る心地と二日と過下
 たる不樂し限りるさるる。介程は楠式部少輔正直の居るの士卒共侶。姑麻姫主
 僕と伴ふて京師と出てくるもの一日二日とある里小節。錦の花散りて丹楓の末一新樹
 做も高峯過る杜鵑聲喚か。河内路もさるる。珍らるる四八さるる及八九村の莊
 院近くる。隨の駒の足搔と早めけ。傍の一回小彼岸二。這日も途は立寄てさるる
 多るほどと現れが認められぬ居るの士卒と是姑麻姫が正直を送りてかゝる事とい
 以ひもは胸うち騒て他へ正可小京師より我方さるる向らる。緝捕の大將士卒とと

思の頻る駭怕れて飛が似く八九の宿所へ走還るる息吹あま御注進と々と叫ぶ
 駭く奴婢農僕們緯をあれと立謀と縫殿の奥も喚禁めて出て容子と韃絲けり
 登時彼岸二額より流る汗を推抗拭いて膝突立る聲慌く。さし都路より推寄
 来る緝捕の大將騎馬苛めく四下と拂小那隊の士卒三百名その猛と峯を降
 老虎の羊と趕ふとさる速死と野小揚る雁鳥の雀と抗お似て當さるるもいふ今い
 相距ると五六町あり過る。豫用意いけの為其頭の餘人小任用と快々背門より
 落ち卒おん伴と仕らんやあは快々と聲叫個ま。氣と胸殿肉も立まきまらるるを
 縫殿の謀がま衆人を那這とさるる。這期は迫りて緯を議せ死暇あま
 我身東面する矮樓を登りて遠見とせ緝捕の士卒近づき上より聲を被る。あ
 折小快火を放ち煙が紛れて後門より走るも煙をまわす。さるるもさるる納戸小退
 姿。身装と短刀を引提て矮樓へち登るる。齊一直上より奴婢農僕の彼岸二招参



うつろいお鬼のつてあめあつるも
 兵衛自焼節婦可憐
 有像第三七

せて和正可まを来る緝捕の大勢近着さん。矮樓の暗號を漏さる期の後
 れて捕れん快く出て復た去ると。彼岸にありて門を叩き、僕子引入る聲戦
 走。衆位立に近つた。緝捕使の先隊の先を、彼を倣て逃去と頻りに喘は火
 速の催促大家傳、怵難て原来免れぬ矮樓の暗號を、彼ももろ左せ右せ
 後ろま。左右立する諸慌ふく準備の焼草へ火を投り、先へ逃て往方を
 あり雲を紛ふ煙へ天引ても起する猛火の勢、風靡れて煽々たり、憊る折から正
 直八九の宿所近づく。随ふ心も、件煙を、ち仰せ、膽の散馬にて兵毎他を、ま
 走。那莊院は失火あり、走り取ら、快く滅へ、我は續げと鐘を拍と、草舎地を走
 走。馬を引添、先隊の雑兵非常の與に携へる。鋏又桿棒を、扱え、逸足、蜚しく
 猛く勇る勢、以て千軍萬馬の中をも、摧せ、入る。爲を、縫殿の遙く、乞とて、現
 走。緝捕の兵猶豫せず、這里も、綱入る。是を、短刀を引、抜る。合を直して、念佛

高く十遍許唱へ、果は刃火を咽喉へ、馬熟と、大串で、廂へ、猛火の中へ身と、跳ら
 きて、飛分け、嗚呼、憐れ、義烈の勇婦、一旦、縛の錯誤を、死と、功あり、禍魁が
 は、恨を、多き、琴の良人も、御宗、京師を、迷ひ、同ト、死天の、旅地方、替れ、品降る。
 鄙も、猛に、劍刀、身と、捨、妻、東の、間、栄、枯得、失、幸、不幸、真、愛、苦、歡、樂、主、後、の
 這世、那土、別路、も、遇、ぬ、數、を、知、る、よ、も、る、姑、麻、姫、を、八九、の、宿、所、に、失、火、あり、と、一
 よ、ら、ち、散、馬、を、復、市、と、も、作、と、先、走、り、と、路、の、備、は、轎、子、と、歌、を、隨、時、程、を、ま、る、と、
 火の、鎮、る、と、等、す、け、り、任、り、一、程、は、正、直、の、馬、を、拍、れ、八九、莊、院、の、門、前、に、ち、騎、着、て、
 只、目、下、知、る、と、雜、兵、を、繰、入、り、火、を、滅、ま、れ、近、に、里、を、莊、客、們、も、皆、那、這、ち、走、
 下、を、水、と、汲、か、け、柱、と、倒、し、諸、骨、折、々、掙、死、し、幸、ひ、と、山、風、の、烈、く、も、ま、る、り、一、か、
 東、の、の、焼、失、れ、と、它、へ、過、洋、残、り、け、り、既、し、と、緯、鎮、る、程、は、正、直、と、復、市、と、兩、
 個、の、雜、兵、を、遣、し、と、姑、麻、姫、并、し、を、身、に、宅、眷、と、言、聚、合、つ、任、と、と、緯、の、よ、と、報、知、

去る。姑麻姫の縫殿が往方へ向ふ。誰か知るものなく。東へ燃焼の煙が立上る。
 屍骸あり。短刀を抜持する。月の放る。其首が封じて。件の屍骸と云ふ。
 姫も復市の母の心か。小雲母時もある。其首が封じて。件の屍骸と云ふ。
 まごも焼けて真黒まきり。疑ひの釋がけ。正直を聞き。縫殿と云ふ。
 右まれ一家見る。奴婢の母の今まで一人か。来る。あつた。快楽の事。
 と云ふ。下知。道。雑兵と俱。復市を作。走。那。這。部。法。
 程。五。六。町。西。の。山。路。仰。及。付。ま。り。の。他。の。事。を。そ。の。彼。岸。二。の。
 去。と。喚。け。れ。彼。岸。二。頭。と。拾。げ。ゆ。と。他。飲。和。主。の。京。師。より。何。の。程。か。
 なる。咱。家。の。緝。捕。と。脱。れ。と。家。火。を。放。け。後。門。より。人。の。後。れ。逃。れ。命。運。々。
 頭。他。那。石。不。跌。に。轉。輾。び。折。腰。骨。下。降。撲。差。け。立。起。れ。疲。楚。堪。ら。
 鈍。今。ま。臥。こ。も。引。起。い。ま。復。市。と。雜。兵。四。五。名。来。り。け。れ。他。の。

復市。彼岸二指一示。他我方の奴隷を彼岸二と喚。彼方の首領。
 筒様の。ゆわ。憶。石。不。跌。に。這。頭。の。在。り。と。詞。せ。り。報。知。ら。れ。大。家。俱。
 訝。り。そ。の。所。以。あ。ん。檻。厄。何。の。與。京。師。より。緝。捕。使。の。向。ふ。と。あ。ん。や。況。や。家。火。を
 放。て。逃。亡。た。ら。罪。輕。く。捕。ま。追。し。七。幸。の。七。あ。て。捕。殿。正。直。と。小。宗。上。快。々。と。暴
 走。し。合。り。足。を。吊。抗。八。九。の。宿。所。へ。お。て。來。り。則。緯。の。趣。と。正。直。報。し。正。直。馳。
 端。近。く。出。て。その。と。鞫。る。姑。麻。姫。も。敬。馬。を。障。子。の。陰。に。身。を。吾。非。縁。由。と。
 登。時。彼。岸。二。を。膝。折。布。で。縛。縛。と。招。了。も。趣。の。京。師。を。維。盈。管。領。の。士
 卒。の。為。小。庚。を。肩。負。て。既。必。死。と。え。折。自。己。の。命。逃。走。し。辛。く。河。内。か。ら。姑。麻
 姫。并。維。盈。の。數。れ。と。と。維。盈。の。妻。縫。殿。報。し。折。り。京。師。の。風。聲。の。這。頭。も
 等。々。と。彼。岸。二。報。す。と。這。那。咄。合。あ。り。縫。殿。の。遂。に。疑。ひ。然。し。這。里。京。師
 必。緝。捕。使。と。向。れ。ん。と。期。及。が。油。達。の。家。火。を。放。て。逃。亡。し。先。燒。草。を。准。備。せ

且却人別盤費を賜り小可都路又遊佐殿の城の人も遣てせられぬ
 二三百の死勢の這方推寄來ぬ小可達までければ是必京師の向せの緝捕使
 多るんぬれぬ走のかるんぬ縫殿刀袷報けの然我身の矮樓お登りて見定め
 聲を被んぬ折火をのせんと短刀引提て遠くうち登るの程御執事近
 つるの件の暗號をもふも及ぶ大家慌て那這火を放ち共侶も走りて背門
 よる逃折小可の山路る石小怪蜚骨損て仆れて今も必死と有る隨陳裏
 者顛末分明なれば縫殿の既枉死と片言れば正直の疑ひを解きと側聞
 せ復市と願れうちぞ姑麻姫の歎死倍倍を真患悲泣原來那も子刃と持る亡骸
 縫殿るん我母を思ふの言の出さぬと詮議の果るも程正直何々たる女
 以て穿つて縫殿とちが疑心暗鬼迷はれる疎忽の自滅是非及ぶは是女流の
 りるれ深く外見不足ぬも一家見る奴婢毎々盤費を受る暗號を名を

火を放ち逃縫殿を焼殺するその罪孰も免る就中彼岸を疎忽る姑麻姫を初
 よの細轎子の無せれて街衢を奉れぬ又維盈る伴當の敷れぬるも我
 一切を知れ我も知るぬるこの這奴が知ん該るも云云と縫殿を告て聞せよ那
 這人の名を虚傳へて喋るも緝捕使のさしつかへん知事姑麻姫の恙もあく恩赦小よ
 正と正直を送りて返一奉り何里緝捕使に向る意を這春蠶物の狐狸を魅れ
 告知して逐電する奴婢們をも索半と後ふも那首の沙汰及先佐と細めて措べ
 と雜兵の名預けるあふ至て彼岸の初て夢の覺るごとく眼を睜舌を吐てのん
 幸小解くゆまれば黄檗を詠り啞見は獨苦の身科の今ゆせん方歌頭小
 思念せん間も早茶の奉立られて退けの倦り程復市の膝を找め恭しく正
 直の京を方才彼岸に招きて那焼死する一婦人の縫殿をも疑ひる件の縫

殿^ひ在下^をが母親^をで^はい^は安葬^の之^をと許^させ^の願^ふと正直^ちうち^り聴^て縫殿^も陳^忽の罪^をも
 身故^りこれ^は沙汰^は及^ばず安葬^のの^の姑麻^の姫^も告^て左^も右^もせ^し我^の遊佐^就成^盛の城^に
 對面^{して}今番^の口^に命^管領^の下^知状^を遞^與と^し俵^が那^里の時^宜ま^り拙^者の^の明日^に
 後^日の^の比^召合^んと^多之^の姑麻^の姫^の奴^婢毎^の二^人も^存在^をせ^り一^萬支^ま不^便る^べけれ^ば汝^達
 之^の困^る仕^へよ^かと^宣披^てい^しと^奥へ^退る^を件^の之^を姑麻^の姫^と宅^眷と^示し^てあ^らる^べし
 さ^と遊佐^の城^を赴^け是^をより^雜兵^の辭^{して}京^師へ^還る^もヨ^リあ^らる^べし^の他^の彼^岸二^城
 復^し無^しと^皆正^直後^にい^けれ^ば八^九の^の宿^所に^留め^りの^の正^直の^の妻^女兒^も俱^しと^末男^女の^の
 伴^當と^復市^の作^のま^りけ^れ復^市の^の稍^便の^を以^て姑麻^の姫^の母^縫殿^の枉^死の^の趣^安葬^の
 事^態々^と報^知て^香華^院と^向ひ^らご^の主^從俱^し涙^を吐^きて^心の^の真^愛に^限り^られ^ば側^人の^の
 智^圓小^僧の^の消息^をと^遞與^{され}る^は是^をより^復市^の他^を以^て市^に赴^き柩^を奉^りて^來る^べし
 程^不再^終日^も其^の甘^果と^かま^し小^夜の^の深^くか^つ次^の日^里を^夾ひ^柩と^早き^の宝^珠院^に送^る
 その^の路^を行^きて^我身^の天^命か^らの^如に^欽仙^に別^れる^親と^母と^あは^れ相^見し^と
 只^一日^も二^親を^皆離^れの^の差^り故^に陽^炎の^の命^果敢^てあ^らず^の福^鬼の^の所^為に
 是^を今^も何^もの^の如^きの^の自^殺の^の婦^人に^早き^の奮^勇義^烈が^倒れ^る身^の仇^のを
 たる^人倘^尋常^の女^子の^の徒^らと^左に^就て^も右^に就^ても^世間^に幸^を蒙^りて^我身^を
 然^る事^もい^はれ^ば八^九の^の宿^所に^留め^り置^きて^は奴^婢と^共侶^に逃^走
 と^投て^置く^地方^を迷^ふる^も我^の父^の自^殺の^の由^を告^げる^折を^待た^ず
 空^に過^す本^意を^いは^れる^も難^しう^ち歎^き涙^も露^の玉^を如^意
 九^の宿^所の^の焼^きと^姑麻^の姫^の師^も叔^父正^直を^送り^て昨^かの^の若^者今^朝も
 智^圓禪^尼の^の姑^麻の^の姫^の消^息と^して^身を^復市^に客^殿に^召

程^不再^終日^も其^の甘^果と^かま^し小^夜の^の深^くか^つ次^の日^里を^夾ひ^柩と^早き^の宝^珠院^に送^る
 その^の路^を行^きて^我身^の天^命か^らの^如に^欽仙^に別^れる^親と^母と^あは^れ相^見し^と
 只^一日^も二^親を^皆離^れの^の差^り故^に陽^炎の^の命^果敢^てあ^らず^の福^鬼の^の所^為に
 是^を今^も何^もの^の如^きの^の自^殺の^の婦^人に^早き^の奮^勇義^烈が^倒れ^る身^の仇^のを
 たる^人倘^尋常^の女^子の^の徒^らと^左に^就て^も右^に就^ても^世間^に幸^を蒙^りて^我身^を
 然^る事^もい^はれ^ば八^九の^の宿^所に^留め^り置^きて^は奴^婢と^共侶^に逃^走
 と^投て^置く^地方^を迷^ふる^も我^の父^の自^殺の^の由^を告^げる^折を^待た^ず
 空^に過^す本^意を^いは^れる^も難^しう^ち歎^き涙^も露^の玉^を如^意
 九^の宿^所の^の焼^きと^姑麻^の姫^の師^も叔^父正^直を^送り^て昨^かの^の若^者今^朝も
 智^圓禪^尼の^の姑^麻の^の姫^の消^息と^して^身を^復市^に客^殿に^召

入れて對面あり登時復市の智圓禪尼ふら對ひ僕偶屋小一郎維盈が獨子を復
 市安次と喚做ののちも及せぬ疾仆に時故あり他御は赴かざるも成長のひは徒而
 い身日這地ふ來身その折母の憑の儘と京師に赴か父維盈不對面の望遠たれ
 ども幾日ありて維盈猛可身故のひに哀傷の涙と袖裏裏と姑摩姫上俱一
 なる再這地ふかの來身日母の猛火の為焼れて亦復恬を失ひる不幸と查しぬか
 即便母の亡骸の御寺の土するまき欲せぬ我情願のまき主君の指揮するは是
 らのうも消息を載れてぬいん耳に憑きまるとふ智圓尼數珠練止むを胸
 苦しむる偶屋主の縫殿刀袷まらも續てある下月小喪ひぬり姫上まきを
 便るが不き況和殿の秋心傷とひゆる會者常離泡沫夢幻の世にけり安次は
 むのうもぐるゆる讀經の準備の程のん柩と本堂ら登して姑且休息去ぬ
 と町寧を慰めゆる傍折る一個の女子の墓笥の方より出て復市は茶と薦を焼

とこれい別入るる智圓復市が相伴以來八九の宿所は留め置る垣衣をぬれ復
 市の呆るま胆と洗し左見右見て怪人の方を身は昨燬を避んと宿所の
 奴婢共侶去向も知るのりんとせぬ今這御寺の在んぬ思ひぬ
 對面を以てあめ甚麼をぞ問ふ智圓尼推禁め訝りある這女中の身日
 身の母大人が消息とてかぬ折使の口状も是れ他御の客でたれ縫刺とて先行
 伴人のかろまき権且御寺の留め置て甲まき使せぬと他事き憑れられそ
 依這里の留め置るまほ小折失火の折を煙のそえん這垣衣が最痛縫殿刀袷の
 うへを左中へ有あんと起て居て苦みせられか男の医に女僧院に誰と遣
 ん人けられ共侶の氣と問ふの傍れ這個垣衣の自焼のの干くま然と訝るころと
 へ亦垣衣も涙吐ひ臉を拭いて御堂の身身の娘々君の苟且るぬ情奴家と御寺へ
 憑きぬその折を脱る一衣箱の衣もの身が京より還るゆ折まきを預け玉

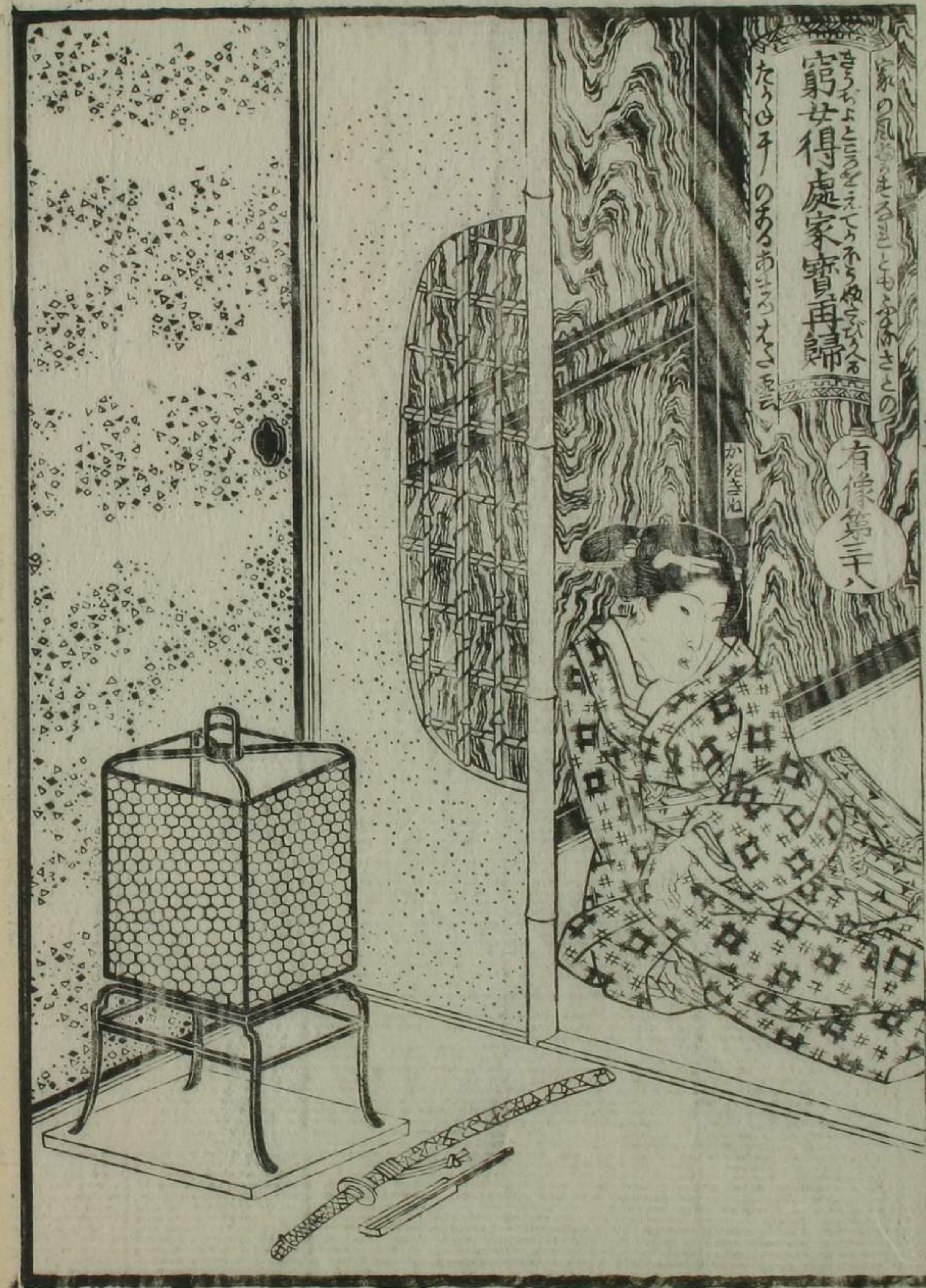
ひの匣も這里不ゆるか。情由の巨細も知らざる。今ハ紀ふる。或別を哀しけれ。ひの匣も
 と泣沈め復市も堰留難る。眼水も枯と困頓りて。肚裏も空き。原來奶々の自焼の覺
 期も。少女も這女僧院頼まて。緊要は匣を預けぬ。いんをみる。垣衣も火の
 焼れぬ。迷ひ地。往方も知らざる。我身を合て大なる。我理ある女子も。親中
 いま告さす。小僧も。敦く計れる。我親を。違ふ志を。微妙に。我ハ不及と。徳義を
 感考今も。迷憾も。弥増せ。人告る。我ハ。親を。更め。恭く。智圓尼も。對
 して。僕ハ。昨姫上。俱く。這地。速り。我母。這妙。法寺。預け。まわ。せ。る。とも。知ら
 恥ハ。過言。允さ。せ。あ。か。就。宿所。の。奴婢。毎。昨。迷。る。速。電。ま。れ。姫。上。の。辟。近。く。使。り。め
 い。の。自由。の。至。り。不。い。とも。垣衣。を。返。し。あ。る。宿所。俱。く。あ。る。欲。き。這。美。を。願。ひ。ま。る。と。他。事
 る。い。と。智圓尼。の。听。り。屢。點。頭。て。そ。の。易。ら。く。宿所。の。半。分。焼。て。そ。の。它。の。恙。も。
 と。致。す。け。も。其。頭。の。修。復。果。る。も。姫。上。又。我。寺。に。在。を。も。け。ら。い。あ。る。先。住。の。建。ら。る。離

根亭も。ゆる。か。間。本。堂。衆。徒。と。聚。る。鐘。の。声。鐺。々。と。鳴。る。智圓禪尼。の。遠。く。
 辭。して。方丈。へ。退。る。法。衣。と。更。り。て。本。堂。出。て。來。れ。徒。弟。の。比丘尼。六。七。口。木。魚。を
 鳴。り。羅。列。し。誦。經。羊。响。許。復。市。の。初。め。獨。施。主。席。に。在。る。葦。礼。訖。焼。香。果。て
 母親。縫。殿。の。七。骸。の。正。元。夫。婦。の。墓。の。側。に。推。降。て。葬。り。け。り。既。中。復。市。の。住。持。并。比。丘
 尼。達。別。を。生。德。と。稱。て。垣衣。を。促。ま。る。垣衣。の。逸。早。く。身。装。し。て。第。二。の。往。日。縫。殿。を。預。け
 たる。智圓尼。の。請。り。て。復。市。の。遠。與。け。り。登。時。復。市。の。垣衣。衣。箱。を。它。の。東
 西。の。央。奴。們。の。ち。駝。し。て。垣衣。を。取。ら。去。程。の。真。実。を。比丘尼。幾。名。致。して。垣衣。を。勞。ひ
 亦。一。さ。て。目。送。り。け。り。是。より。程。麻。生。復。市。の。身。の。暇。も。折。る。姑。麻。姫。の。意。衷。を。生。て。正。元。の
 葦。所。を。た。の。悄。々。地。の。京。に。赴。て。正。元。并。父。維。及。骨。枯。骨。を。壺。に。斂。め。土。中。に。兩。刀。も。と。て
 還。り。復。市。宝。珠。院。改。葺。ま。る。父。母。忠。る。れ。子。の。亦。か。の。如。忠。孝。あり。夫。實。鳳。の。卵。も。その
 離。必。為。鳳。之。玉。樹。の。花。さ。く。の。実。も。玉。又。藍。より。出。て。藍。る。も。青。なる。復。市。飲。は。是。後。話。

第二十八回 山上の千里鏡 克莊院と颯夫 佛前の本命録 初て病味を知候

かくていひつゝ、まはりのつらさなるに、
却説石倉復市の垣衣とて、その黄氏、八九に社院のあつて、
いと誅く、ゆづ。軀て、他を、嘔、近、着、て、這、頭、の、
佐殿の城内の宿所あり。權且其首の住のべと、
時候でいひ、は、は、我、姫、上、の、萬、幸、又、使、る、か、
と、さ、り、と、い、ふ、復、市、點、頭、で、又、垣、衣、と、伴、を、
絶て、人、氣、の、ま、り、一、く、且、垣、衣、と、次、の、回、
る、る、京、上、七、僕、不、慮、不、慮、故、御、
と、さ、り、と、い、ふ、早、暮、京、師、の、中、も、
折、る、る、一、く、と、さ、を、誅、し、思、食、
折、る、る、一、く、と、さ、を、誅、し、思、食、
折、る、る、一、く、と、さ、を、誅、し、思、食、
折、る、る、一、く、と、さ、を、誅、し、思、食、

目今この事おければ正直まの死老小の皆遊佐殿の城内へ迎合されりし初て美知佐。這
折をりて乃者の意衷を盡し、人々と多ふとて大胆なる身。二親の忌服あれも異事慮
外の折をり、喪の中、誓を麻衣の流す世の争何れぞ許さるべし。ゆゑあはれぬ。いと解
く、我、独、と、ま、と、姑、麻、姫、と、も、所、て、ぞ、我、望、む、所、叔、父、君、の、伴、當、の、送、り、れ、る、も、
は、は、と、這、里、へ、は、遠、る、も、京、師、を、維、多、在、る、ま、り、と、い、ふ、心、り、と、ま、り、と、い、ふ、
也、せ、よ、る、人、と、ま、り、と、い、ふ、と、竊、聞、く、も、惜、め、ど、も、歎、け、る、悔、め、も、返、さ、り、
差、一、人、言、の、仇、と、做、り、雄、々、と、の、怖、と、自、殺、せ、れ、の、我、恨、の、故、り、と、香、相、夜、の、炭、と、
臣、節、婦、を、喪、い、ぬ、不、幸、の、何、と、も、我、身、の、為、中、一、大、不、幸、百、目、の、事、を、
豫、知、る、你、が、か、ら、来、べ、し、と、い、ふ、思、ひ、を、さ、り、来、て、親、の、忠、義、を、承、も、嗣、も、
由、と、詳、し、く、知、り、靴、を、痛、く、癢、と、掻、く、心、地、の、ま、と、本、意、を、告、其、麻、衣、と、同、
れて復市、秋、然、る、貌、と、改、め、聲、と、密、め、て、父、維、多、京、師、也、管、領、山、滿、家、の、主、宰、の



為小深疾を肩て竟尔自殺及び首をへ尾又箇様々との折の送言を
 報知する事許す又小可が西の故御かへ情由を以て養家も飽れ
 緯の趣後の養母の養子三郎の家を嗣せんと折る途を必死の大死ありと
 幸く免れて浪華も来まはる這時影と驟退身の折るべくはふ一個の行伴の
 池の女子をへ捨るふ忍び相俱へ遂に故御かへ絶て久し母親も再會の本意を
 遂に父惟為姫上の高野詣傳へて還るを折母の推量も姫
 上皇城を亦肉をも京へ赴かぬ夢を心かこりて京師
 赴きて訪ひをられ行伴の女子も久九の宿所留めて他と安内を諱れ
 たれ曉小生夜宿路次とい管言を多々京師に到りて姫上獄舎敷系れぬ風
 聲詳しゆえに驚き那道と獨徘徊せ程小父維盈満家主を保持媒鳥の
 捕網られ遠箭前射られて既小深疾を肩ひ折料も其首を赴きて豫修煉は飛と

仇と矢庭敷を退け既小父維盈を肩引掛け去る日圓の頭を觀音堂と親
 るよりも子も送小名生り名告りて會を別れ日暮春追外は降驟雨神淋一行
 涼きりか下と覚悟の父の思ひ旋に後軍只姫上の御先途を看せんと町寧小父送
 忠誠勇猛禁ると听を奮激してみづ加ねぬ死父を枉死に満家主の細轆を秘計を
 のて姫上の支黨も捕捕んと欲せしを知りしも無せられて緯比皆画餅なる後悔の
 外に那彼岸を招き小烟轎子にひき正直主の知る秋搗鬼とわれこの一糸を
 満家主の秘策ある後まも情由を知りしも早あえ侍て當晚小可父維盈男亡骸城
 觀音堂の頭を瘞て又途中赴きて姫上敷れぬ日小極ひやると克だ一人をの仇を殺
 して眞上の死伴を死と決りて那道の風聲を探ひ小赦子遇ひ東緯の趣を由明
 牌の寫されて伴當も正直主の策を参りて伺示さる事分明を疑ふもあられなく
 忽地意表を親小父の他を正直主不見参る姫上歸御の死伴小父とゆひる

介する御貞の僕が。這里に留置する。女子の往方知れざれば自焼の折に婢妾們の俱む
 送ひ出さる。推量するに他は有り。宝珠院に在る。料をも對面して縁由を問ね
 日我母が徳々と誘ふ。那里遣へらる。折小可が来る。取重あつた。一
 箇の重臣の件の子の預け遣。這里に長調度と云く。合せり。事の情を猜する。小
 母縫殿の只管の彼岸に似而非注進と世の風聲を惑されて。姫上も維盈も。京宅敷き。あはれ
 以て。緝捕使向て。自焼と死念。既覚期と云く。折小可が行伴る。女子といそ助けん。そ
 縛云々と誘ふ。那女僧院豫も遣へる。疑ひ。件の女子の名を垣衣と唱做する。のふと
 故御の伊勢も。某の里之由緒ある。武士の女兒れ。過世して小可と虎筋泥を俱へ。這地
 伶行ひ。けれ有敷糸の揮も棄る。折る。死宿所の婢妾毎の一人も在る。一六智圓
 禪尼の請京して。依俱と云く。先那重臣と御覽入れ。後方と云く。宝珠
 院より来る。多匣と云く。合て恭く。姑麻姫も。あはれ。小程の姑麻姫の。聞く。と母不

後悔の額を病し。嗟嘆。維盈との縫殿との。或の敵の為の謀り。或の躬方。行はれて
 命果敢る。かり亡せり。比自是我身の越度也。師の誠と守らる。出立と知れ。罪重なり。
 男も倍する。夫婦の心烈。その甲斐を似れ。仙より遠離る。その獨子を復す。料
 む。故郷の来る。親の忠義を接ぐ。是は花謝と実と結。二世の天縁。最重なり。然るに縫
 殿が送らる。匣の必要あり。何ぞある。と云く。復市あり。て。重
 封皮せ。韓組紐を解返。又と返返。七開は。内正元夫婦の木主并菊水の旗。返る。金
 銀。只一枚。目録の左編。金の三寡を寫。木主祠堂。然るに。旗の什物と
 秘指の。短く。送る。等。の迹。勢。宛決然。男優。女文字。その。子。為。一行
 たる。今般の忠義。義胆。深く。感。主従の。憶。面。語。火。感。涙。の外。を。け。且。と。姑
 摩姫。木主。旗。を。合。て。額。不。殿。許。ら。念。と。匣。の。痛。め。臉。を。拭。ひ。て。喃。復。市。敷。れ。け。り
 と。思。れ。る。我。身。を。の。恙。も。な。く。縫。殿。が。今。般。の。佛。場。秘。え。と。せ。一。家。の。重。臣。の。名。も。我

てお還りし山中の吉福中の福い火の中も焼れ人の中も渡せ倚伏の糾ふ纏ふ似え定めぬ
 此世の起住い神をもとく知るやとよ小復市慰難て姑且俱小惘然さ登時姑麻姫の果
 去るげは甲夜過ぬらんとよの四下さるるや復市你が俱して来るとや垣衣と鉄の女子も
 甚麼を若きとえぬのとめて復市心にて冥かその毛も此世這那と直宗まよの言をりければ
 是て見參邊滞及びつ先より他は死次の間ゆりしれが不承けんてとのひさる邊
 身と起とて垣衣を這方へと喚立つ會釋とされ垣衣の阿と応て找入る見參邊當下姑
 麻姫の燈の下よりと垣衣と執視るふ二八の女子と容止の艶麗る舉動も鄙るる
 現復市がいつふ差左の由緒ある武士の女兒とそとよ近く招きよて初て遇ひはる真実
 漏れぬ我身を摘て艱難さそと想像る和女郎の故郷の伊勢るる復市の中縁ある人
 響け初見参より取瀧心し心地をる奴婢小匠に折るれがま使を言まわりの毛とるる玉
 ひてよと最懇る言の葉と挿頭の花と垣衣の感涙坐額つて世末有る死御親命まうま

百るるまらるる星の出来身神風の伊勢路より流れる河内と相識もあはる
 はるるを憐れもあはる新水の事でも厭れと鄙の田舎小生育て心づたるるるるる
 させぬひかとのと姑麻姫を更老否物々ま主れはるるここも田舎の僑居の富貴ありて
 礼節を知るといつ伯るるぬ隔あてあはるる復市の三世の誼第我身の與俗俗も
 乳兄弟を伴るる萬古と憑心のるれも有敷系小男女の差別あり身邊親く使んとの
 你小優きとあべやと憑心示さる垣衣然る且感服と是より側と離るるよ萬事正
 首小供一か姑麻姫も歎いて夜の臥房と俱れまも聊小介意せ獨心小まも垣衣を才
 長七且心さるも虚華るる他は必復市が結髪妻ありて俱小故郷を走らるる今も復
 市が親の忌服あり他は謹慎む死時ありその情縁のことも質問ひる恥ざらんや一稔
 等て復市が親の服の関一折我身必媒妁と夫婦さるるま死りぬと尋思とせ程小忽
 地小悟るる是義小我師の別れ位をて示させぬ一三四の句の垣衣粘石虧盈復安と

則今の身も。垣衣の是れ。是れ。是れ。他石倉復市は伴れ。末おられ石小粘といふ折し。のれ。維盈夫婦の禍鬼。身と殺せしへ。も。子復市安次が不思議。伊勢より。か。来。我身復安。ふ。よ。と。四言三句。小盡されて。盈と虧。維盈夫婦の虧。る。の。復安に歸。村。その。子。の。偶。然。ある。も。又。前。二。句。の。遇。一。必。破。と。の。一。休。さ。し。既。是。分。明。只。會。六。有。歡。と。示。され。る。の。今。も。内。合。さ。す。ま。れ。も。我。仙。嬢。の。神。機。計。算。後。必。悟。る。と。わ。ん。然。び。を。我。の。京。師。也。敵。一。人。も。敷。を。治。せ。と。身。の。縲。縛。の。辰。と。受。て。股。肱。の。隅。屋。夫。婦。を。喪。ひ。母。の。違。教。の。科。之。縦。奇。術。の。破。れ。も。又。劍。俠。の。技。を。要。せ。今。より。女。使。あ。る。も。は。と。獨。心。小。抗。言。の。深。念。の。腑。を。固。め。け。る。信。而。有。一。日。姑。麻。姫。の。復。市。小。事。吟。唱。の。語。次。の。俗。の。既。小。親。家。と。去。て。実。父。の。迹。を。嗣。る。る。石。倉。名。乗。る。の。要。る。隅。屋。復。一。郎。安。次。と。父。姓。名。の。御。京。師。の。在。り。折。三。管。領。も。知。れ。小。も。伊。勢。へ。憚。る。と。あ。る。も。他。の。姓。を。言。え。る。隅。屋。と。名。を。小。相。心。か。め。の。美。心。屬。る。飲。と。の。れ。復。市。何。と。さ。る。小。雲。時。の。心。を。せ。せ。せ。

小と答る。仰。定。ま。の。理。あり。小。可。も。亦。件。の。義。を。思。ひ。つ。も。爭。何。せ。石。倉。氏。の。稟。を。養。育。の。恩。一。朝。の。あ。る。縦。親。父。母。の。欲。ま。ま。義。弟。小。家。叔。日。を。讓。ら。ん。伊。勢。還。る。ま。り。後。の。幸。ひ。の。子。二。人。も。生。る。が。一。人。の。必。石。倉。氏。を。言。わ。り。て。本。來。の。志。を。全。う。せ。姓。小。立。復。る。後。小。至。と。幸。ひ。の。子。二。人。も。生。る。が。一。人。の。必。石。倉。氏。を。言。わ。り。て。本。來。の。志。を。全。う。せ。あ。の。義。を。許。さ。ぬ。ひ。か。と。の。小。姑。麻。姫。感。嘆。と。現。安。次。が。老。実。多。一。椀。の。糧。一。夜。の。宿。も。報。の。義。士。の。志。況。年。來。艱。育。せ。れ。報。恩。然。し。と。感。嘆。と。却。莊。院。を。修。復。せ。る。并。小。奴。婢。農。僕。を。新。小。養。育。せ。ぬ。と。村。長。の。高。量。を。他。の。通。て。我。父。祖。の。德。を。忘。れ。ぬ。の。を。れ。封。助。あ。る。と。あ。る。と。又。這。一。義。を。談。せ。る。費。用。の。量。小。室。町。の。堂。中。小。倉。院。よ。り。賜。り。ぬ。と。渡。され。千金。あ。り。然。れ。も。縫。殿。が。貯。る。財。用。を。遣。り。か。く。小。雲。時。も。猶。豫。さ。る。と。の。復。市。あ。る。と。次。の。日。村。長。と。故。老。們。の。件。の。よ。と。告。知。と。緯。の。便。宜。を。徵。り。約。莫。當。國。の。農。戶。商。賣。ま。で。

皆正成の徳徳と昔承てたきことなりのもふ今番姑麻姫が京師で復讐言の爲の辨
 多き發覺れて宿望を遂ぎしを愉快のの言ふと語の接吻結て馮心く案折るれ件の
 よと相譚れて更の憚る色も多し鄰郷ももうち取合て商量速の整ひられ男女の見孫多か
 への相応しを迭小擇て各々八九の荘院遣し或の奴婢と做し農僕申てはれ姑麻姫の仕
 るの初より言々をぬきせりて御の正直より隸される老伴當三三名東西と合せ勞ひく
 主の返遣しける徳て又村人の山ありの木を伐出し食ひたの夫役まで力を盡て荘院は焼
 たる處を修復せし家も亦初より最奇麗なるをこれ姑麻姫の思ひより錢財言々費
 して落成速きければ是祖先の恩徳と村長并小村人們の俠氣致致斬とそその間日毎
 日毎飯の酒と餽りてと町寧勞ひられ威勢ひて粉骨と盡さるのさけ然又稱
 正直家宅の地所を這那と口管小擇と姑麻姫の宿所より六七町東のくふ山川ある處を
 占て孤山と内河細小川と前河の家と造る招は応き番匠們早申て作支遅滞及びりら

秋に至りてはく不稔徒をくけり憶を病鬼の出事とて甚思ひづもあつけれ其頭のうみ成
 原の正直一個の女兒あり名を吉子と喚做て今茲へふ多しはれ姑麻姫と同庚之遊莫標
 致の町也額廣く頬肥膝て鳩般木茶の似るべれ化の傍る深山樹る七日と同居せり
 此論をもあつて這秋痘瘡と患ける怖る難痘也毆巫師は匙を指て召べも來む
 驗者の壇と降りて效るといふの故の正直夫婦は憂悶て寢食と安んせむいふ志と
 ろら譚ふ這里より程遠く如意宝珠院といふ女僧道場なる本尊地藏大菩薩人の病
 厄利益ある特小婦女子の難病平愈し禱る小心驗あつて居る住持の尼菴小祈禱城
 憑を護符といひぬるやと其薦りのありは正直這議を信容てその日妻の木石と宝珠
 院遣しける余程の正直の渾家木石は伴當幾名狹徒へ轎子を飛んて各々宝珠院へ赴きて
 地藏菩薩と拜し居る住持智圓尼小對面と女兒の病瘡と生け祈禱を憑と吉子の
 肌膚衣と生れ歲月の小録と祈禱料の金一包とまをせけれ禪尼速く美引てけより初念を



依石仙第五卷四

玉のゆみ

下と先護符と與へけ。是よりと木石の日毎々小室珠院へ專使と遣はし護符とせせり。
 ける菩薩の利益愆をせりなき日と麻のけり苦子の難痘稍瘡て既小結痂及びまて。
 辛く命根の係留も痘癩酷く送ての醜婦もまけり正直は是等の所以久く。
 八九の莊院へ赴きて姑麻の姫の舉動を看るとの情々地々人を遣はし那首は動靜と。
 硯も不詳知。知るとは一日みづく宅地の内へ孤山出ち登りて那這と觀且。
 未姑麻の姫の宿所の光景残り多くて是れ九竟と欽びて後中十里鏡との日毎。
 那里と觀ふは姑麻の姫の折々坐席の半分まで鮮明にてえざる。那の奴婢の。
 姑麻の姫を知りて便りするは正直綱不欽びて我みづく那果もくも姑麻の姫必小心とらち。
 解さるる人。這眼鏡とて居る。那果の動靜と觀へ他馬脚を露をて生をいと易く。
 嗚呼我ら妙哉と獨頼の不自負自賛と。那果の動靜と觀ふ母遊佐の城消息と。
 昨の姑麻の姫宿所宅傳るとのひはけは又は時を報るも然と京師へさへあべ密。

謀の筋あるあねね就盛の冷笑してと勞ふとるはより正直も亦勢以衰漸々悔と自親又。
 孤山登りて折々家頼の吟吟と。それ外は已ぬ高間の山の雲を合をえりもさけり。
 程の姑麻の姫の叔父直に稍久く訪も来るは女兒苦子の痘瘡の重かるり。知るは絶てけ。
 ねも疎遠で得意の後安と。折々の風聲と心もく。那彼岸の比正直の擲。
 捕れよ遊佐就盛が沙汰と。彼岸と共侶の逃ぐる奴婢農僕們も往方と涉獵り擲捕と送。
 獄舎を敷き。拷問數回及びか。他者の悪意あるも。那折縫殿の暗號と。たて。
 快火を放ち逃る。その罪同し。彼岸を招了と異多し。左右も程。彼岸二并。一。
 両個の奴隷農僕のおさ。日毎の呵責の勝り。獄舎の内へ身故のけ。這等と。締の本人とて。
 二の疎忽も。縫殿の自焼及び。然りと。伴と報る。あ。比皆是言の錯誤。誰。
 由討て事。賤の智慧浅ければ。漫火を放ち。逃て。罪を免る。とて。

彼岸二并のそつたれもの命を殞す不便き。明日の縫殿が満百の卒哭忌の丁に於て他方與
 小も經を讀し之菩提を吊ひ給ふせん。思ふ所を任々と復市のゆえ知して宝珠院へ好事なりを
 町寧の憑心遣次の日復市と奴婢二西名をわけて轎子ふら乗らう。那女僧院に詣りて讀
 經の間姑麻の姫の本堂の傍に伊豫簾を垂る内在りつらと見且まふ。承塵を掛る漆牌が丁
 丑年五月廿八日夜八時出生の女子。痘難解除の祈禱七月廿九日より八月五日まで願主楠氏と
 白墨のての寫なり。あつたてて法蓮果て客殿に住持智圓尼と晤譚の折四表八表の
 語次那那美塵掛られる。漆牌のまの向に智圓尼の微笑てお身いませ。知し召さぬ。那の叔
 父公正直主の息女廿子小姐のゆゑに痘瘡を命危ら。折尼が祈禱を憑れて本尊延命地藏
 菩薩の七日初念のゆゑに於果と利益をすて日數のどく瘡のゆゑよめてその生年月を忘る
 與小寫しを信するの折々ゆゑに今番限の祈禱をわびと小姑麻の姫稍悟りて廿子の奴家と同庚
 多の豫せられも誕生月自と時御牌よりて初て知れ。那少女今茲まで痘瘡をさし果さ

子狭小父の久くをえぬのゆゑの障りより兄を毫も知らせられ我從父女弟の病着ありし御寺へ
 詣りて初て知るの反復を恥してを信するれと陪話る。智圓尼慰めて然る宜しそ世の鄙語。燈
 臺還て下暗し。これら。故のゆゑに身をさす。當寺の延命地藏尊のたて女小御利益
 多の先住智正大禪尼の推し。時大病を十死一生をける。這里の御佛の救れ。遂に本復のゆ
 げにその佛恩と報せ與。女僧ふらありとをえ。是れ身身の伯母御前を豫せ知るあり。現世の
 利生灼然るれ身後の引接勿論。は追唐の亡者達。隅屋氏夫妻彼岸の毎孰も成佛せざるに
 深信念りのまゝと鼻春蠅めりて示さる。姑麻の姫の恭しく心とつる言果て辞別と立の折に智圓禪
 尼の遠く昨日贈られ讀經料の欵を舒さう。知客の女僧を先立して玄關近く送り。信て又姑
 麻の姫の轎子ふら乗らう。宿所へかゝる程ははぐとゆる。約莫人の本命の生れ年月日時の枝
 幹の神事も仏事も告て眞福を祈るのゆる。宝珠院をさる廿子の本命の十幹兄弟を
 用ひて月の數日の數も寫着られ。あるね意ふ。八字生來とのことを知ぬ。心小狭し宿

所^あ還^りて^も甲^ひ夜^まの^不間^ぐ惜^つ字^ら箱^らより^{十六}年^{ねん}以^の前^{せん}の^應永^{えい}四^し年^{ねん}丁^{てい}丑^しの^舊曆^こを^去る^りて^獨
 燈^あ燭^くの^下檢^{けん}し^らかり^し年^{ねん}五^ご月^{げつ}二^に十^{じゅう}八^{はち}日^{にち}小^{せう}暑^{じゆ}六^{ろく}月^{げつ}の^節節^{せつ}と^即丁^{てい}未^みの^月月^{げつ}又^{また}二^に十^{じゅう}八^{はち}日^{にち}是^こ辛^{しん}
 未^みの^日日^{にち}是^こ辛^{しん}八^{はち}鼓^この^時時^{とき}當^{あた}れ^り信^{しん}れ^ば苦^く子^この^八字^じ生^{せい}來^{らい}の^丁丁^{てい}丑^し未^み辛^{しん}未^み已^い丑^し本^{ほん}命^{めい}
 多^たと^疑ひ^る我^{わが}身^みも^同庚^{かう}な^れも^壬子^じの^月月^{げつ}乙^い巳^しの^日日^{にち}巳^し卯^{みう}の^時時^{とき}生^{せい}れ^り八^{はち}字^じの^吉凶^{きう}大^{だい}く^異多^た
 苦^く子^この^八字^じを^考考^{かう}ふ^丁丁^{てい}丑^し未^みの^比比^ひ冲^{ちゆう}也^や是^こ凶^{きう}信^{しん}れ^ば年^{ねん}と^月月^{げつ}と^應丁^{てい}丑^し未^みと^見見^{けん}の^辛辛^{しん}未^み
 と^天天^{てん}尅^{こく}地^ち冲^{ちゆう}亦^{また}尅^{こく}但^た年^{ねん}は^丑丑^しと^時時^{とき}の^丑丑^しと^比比^ひ肩^{けん}な^れ凶^{きう}な^れの^女女^{にょ}の^男男^{なん}の^愛愛^{あい}も^も忘^{わす}れ^るも^それ^容容^{よう}止^と
 美^みと^醜醜^{しゆう}の^差差^さの^素素^そも^美美人^{びじん}の^ああ^毛毛^{もう}然^{ぜん}と^痘痘^{たう}瘡^{そう}の^損損^{そん}れ^る賣^{ばい}難^{なん}て^さを^真真^まな^るべ^いと
 痛^{いた}れ^ると^人人^{にん}を^身身^みの^不不^ふ示^しも^十十^{じゅう}穗^{すい}の^芒芒^{ぼう}色^{しき}の^出出^{しゅ}て^秋秋^{あき}風^{ふう}戦^{せん}庭^{てい}の^鳴鳴^{めい}の^虫虫^{むし}の^音音^{おん}響^{きやう}け^る殺^{ころ}
 氣^きあ^り怪^{あや}し^や今^{いま}宵^よの^事事^{こと}あ^んと^夢夢^{ゆめ}め^る人^{にん}告^つ告^こを^獨獨^{どく}睡^{すい}を^小小^{せう}夜^や深^{しん}る^も此^こも^由由^{よし}断^たる^るなり^畢
 竟^ま姑^こ摩^ま姫^{ひめ}今^{いま}宵^よの^先先^{せん}見^{けん}差^さを^又又^{また}甚^{しん}麼^まる^事事^{こと}あ^るそ^六卷^{くわん}と^更更^{さら}て^這這^{ぜん}次^じの^解解^げ分^{ぶん}を^聽聽^きか^い

開卷驚奇俠客傳第三集卷之四終

